

小田原史談

第110号

発行所 小田原史談会
小田原市南町2-3-21

後北条氏秘話 (16) 流転の姉・悲劇の妹

中野敬次郎 執筆

(一)善徳寺会盟の 組板に乗った三女性

前にこのシリーズの中で一度ふれたが、小田原北条三代氏康時代の天文二十三年(一五五三)に武田、今川、北条の三者による善徳寺会盟という同盟条約が成立した。簡単にこの同盟の概要を記すと、この年、甲斐の武田信玄、相模の北条氏康、駿河の今川義元の三雄が互いに対立し、まず三月に北条氏康が今川義元を攻めて駿河国駿東郡下方荘を侵略したのが発端となり、義元が武田信玄に救援を求めた。信玄はこれに応じ、甲斐同盟軍と北条氏の豆相軍とが駿河の刈屋川に対陣して戦ったが、それぞれ一進一退を繰り返して、次第に戦禍は東海地方全体に及ぶ気配

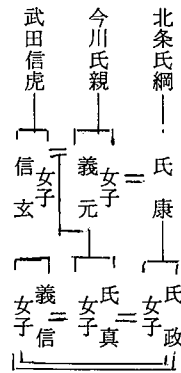
となったのである。

これを愛した駿河府中の臨濟寺住職で、今川氏の黒衣宰相とも呼ばれた大原雪齋が、三家の和平を提案し仲に入り、氏康、信玄を駿河に招いて義元と会談させることにした。この計画は一応成功をおさめ、春四月に駿河(富士市)の善徳寺という禅寺で、北条氏康、武田信玄、今川義元の三將会談が実現したのである。これを善徳寺会盟とい

この女性たち、即ち善徳寺会盟の組板上に乗せられた三女性は、何れも戦国乱世といえなくもない。そして事実、三女性とも生涯を不運に終ったのである。

年)七月に北条氏康の娘が今川義元の長男氏真と結婚し、十二月には信玄の娘が北条氏康の長男氏政のところに興入れした。つまり三將の各嫡男へ、三將の娘が相互に嫁ぐという面白い姻籍関係が結ばれ、それによって同盟が成立したのである。

善徳寺会盟でできた 三国同盟による婚姻関係



夫の義信は信玄の正室で公卿出身の三条夫人の腹に生まれ、性質は温厚で家臣から信頼はされていたが父には愛されなかつた。信玄は愛妾禰津御前の生んだ勇猛な性格の三男勝頼を偏愛したので、いつしか家臣の間にも信玄と義信の不和が噂されるようになっていた。その噂を決定的にしたのが永祿三年(一五六一)の桶狭間の戦いで今川義元が敗北したときである。信玄はこの機会に凡庸な義元の子今川氏真を亡ぼして駿河を占領しようとして企てた。

これに対して義信は、妻の兄である氏真を援けようとしたため、父子が対立、父信玄は嫡男義信を謀叛人として幽閉するに至ったのである。

ここで一番悲劇的な立場に置かれたのが義信の妻であった。しかも義信は幽居二年、遂は永祿十年(一五六七)に三十歳で自害し果てたのである。実父と夫とを不幸な運命の下に失ったこの女性、悲痛のあまり直ちに

第五代(太守)を生んでから立て続けに三男二女の母となったが、若い身で沢山の子供を生んで、そのために健康を害したのかどうか、永祿十二年(一五六七)六月十七日に二十七歳の若さで小田原城中で急逝した。

その翌月の七月、これを聞いた武田信玄が小田原征伐の大軍を催し、自らこれを率いて小田原城を包囲猛攻したところを見ると、信玄は小田原に嫁した娘の死について、余程小田原北条氏への怒りがあつたらしい。この女性の死因については、今後なお検討すべき余地がある。

譚名して黄梅院殿春林宗芳大姉というが、この女性の若き生涯にも何か悲痛なものがあったよ。さて本樓で特に取りあげようとするのは、北条氏康の娘で、今川義元の嫡男氏真の夫人となった早川殿のことであるが、この夫人も薄命で流転の人であった。善徳寺会盟組上の三女性が皆不幸な生涯であったことは、戦国時代の女性の姿を如実に浮き彫りにしているように哀れである。

(二)今川氏真夫人早川殿

北条氏康は非常な子福者で、北条系図を初め普通の系図書には、氏政、氏照、氏邦、氏規、氏忠、氏光、

氏秀の七男と五女とが伝えられていて、しかもこの男女十二人がすべて賢夫人で有名な瑞溪院の一腹に生まれたといわれている。

しかし実際には女子は七人あり、男子も嫡男氏政の兄に新九郎(天用院殿、天文二十一年三月二十一日歿、伝心庵通却帳)のあったことが明らかになっているので、いくら多産型の瑞溪院と雖ども十五人を一人で生んだとは考えられず、氏康には一、二の他に愛した女性があったものと思われる。

さて早川殿は北条氏政の姉にあたり恐らく瑞溪院が最初に生んだ子供であろうとすると、早川殿の父母の氏康、瑞溪院の結婚は恐らく天文五年で、氏康二十歳夫人十四歳のときと推定される。早川殿にとっては弟の氏政が誕生したのが天文七年(五〇)であるから、その姉の早川殿の生まれは天文六年(四九)で、母瑞溪院が十五歳の若さで生んだ子になる。氏政とは歳児の姉弟であった。早川殿が氏政の姉であることは諸書に見えるが「小田原記」の中にも「氏真の御前は氏政の御姉」とあって、ほぼ間違いなからう。

早川殿は北条氏全盛期に氏康の長女として生まれたので、ひどく可愛がられて

育ったに違いない。善徳寺会盟の約によって今川義元の嫡子氏真と結婚したときも、盛大な嫁入り仕度を整えて、駿府に送られていった。

この時の様子が武田家の史料として知られる「甲斐妙法寺記」という書の中に記されている。

「此年七月、駿河ノ屋形様へ相州屋形様ノ御息女様ヲムカヒ申候。御供人数ノキラメキ色々持道具、我々ノ器量程被成候。去程ニ見物、先代未聞御座有間敷候請取渡へ三島ヲ御座候。日ノ照申候コト不及言説。餘リ不思議サニ書付申候」と記している。同書のこの前後の記事によると、ここ三年間に日照り続きで雨がほとんど降らず、三十年来の不作であったとあり、それだけに豪華な花嫁行列は人目をひいたのである。

しかも夏七月の嫁入りで小田原から箱根をこえて三島に至りここで今川方に請取られて駿府(静岡)に入るのであるが、彼女の道中の感慨はどんなであったろうか。

このようにして結ばれた氏真夫妻であるが、彼女は十八歳、夫君氏真は天文七年生まれであるから十七歳で、一歳上の姉さん女房であった。

彼女が今川家に嫁いだ頃は同家も全盛期で、氏真の父今川義元の治世二十数年駿府、遠江、三河の三国を支配して東海の覇者を称した時期であった。だが賢臣大原雪斎の歿後、義元の失政が続ぎ、諸事破綻が生じてきたので、義元は意を決して京都進出を計画、永禄三年(二五〇)西上の軍を尾張に進めたのである。結局桶狭間の合戦で、織田信長の奇襲にあつて四十二歳で討死、これより急転直下今川氏は滅亡に追いやられる結果になった。

桶狭間の合戦は、氏真夫妻結婚後七年目の出来事で甘く楽しかった夫婦生活も数年間で消えて、以来十五年間の今川家滅亡劇の舞台に二人はともに主役として立たねばならなくなったのである。

(三)氏真夫妻の駿府没落
今川氏真は通称五郎といひ、上総介、治郎大輔を名乗る。

父義元のような剛毅な気魄はなくて、風流で文芸、和歌などの道にたけた温厚な貴族風の人物であつたらしい。それに反して夫人早川殿の方は、姉さん女房でもあり、実父北条氏康の性格をうけて才覚があり、なかなか勝気な女性であつたので、何事にも夫君氏真を

リードして行ったようである。だが、何分にも武田信玄と徳川家康という両偉物に挟まれては、女の才覚がらいては没落をとめることができなかった。

永禄十年武田信玄が吾が子義信を殺し、義信の未亡人(貞春尼)を兄今川氏真のもとに追い返した時から善徳寺会盟による三国同盟は破綻した。そして翌永禄十一年十二月十三日には、武田信玄と徳川家康は通謀して駿河に乱入する。氏真はこれを防ぐことができずあえなく即日祖先伝来の駿府城を落ちて、夫人とともに掛川城に逃れて、同城を守る朝比奈備中守泰朝に寄つたのである。

これは氏真夫妻の没落流転の始まりであつて、この駿府逃亡の姿は言語に絶する哀れなものであつた。武田軍の先手三千五百余騎が駿府城に迫ると、今川方は一戦にも及ばずに城を捨てたのである。「北条記」に

「駿府の地下町人は申すに及ばず、城中の男女周章慌忙、徒歩はだしにて走り出で、其処とも知らず迷ひ行くを、情を知らぬ下郎ども、ここかしこに乱れ散りて衣裳を剥ぎ、手に持ちたるものを奪ひ取りければ、おめき泣んで哀む有様、哀れと言ひ計りなし」

と記している。早川殿も乗物にも乗れず、はだしで落ちられたときえ伝えている。

この事件を小田原城で聞いた北条氏康は、我が娘の身を案じ、武田信玄に対する怒りをぶちまけて、

「今川氏真その構なく、この時に至つて手を失せられ候間、遠州掛川の地に移られ候。愚老の息女は乗物も求め得ざる躰、此の恥雪ぎ難く候。就中、今川家の断絶、欺げかわしき次第に候松本景繁宛北条氏康書状書下し文」と言っている

これで今川氏は完全に所領を失つたのだから家が断絶したも同様であるが、これから後も氏真夫妻は家なき子のように各地に流転を続けるのである。

一方、北条氏康も兵を駿河に入れて、武田信玄と駿河を争つたが、その戦の続く間に、掛川城では、徳川家康が武田信玄と組んで氏真に和議を申し入れ、巧に掛川城の退去を提言した。

氏真はこの奸言にだまされて、永禄十二年(二五九)五月六日無血開城し、夫妻でこの日掛川城を退去したのである。

四早川殿故郷に帰る
一旦は駿府の城に帰ろうと思ひ途中で立寄つて見たが、一年前の戦いで城は焼

けてしまつていたので、やむなく引きかえして、伊豆の戸倉城に移つたのである。氏真はこの城で夫人の弟である小田原の北条氏政と計り、氏政の子國王丸(後の氏直)を氏真の養子とすることとし、その代わり駿河一國の処置を氏政に委任することににして、身の保全を計ろうとしたのである。

ところが、北条、武田両氏の駿河争奪戦はますます激しさを加え、戸倉城にも武田軍が押し寄せようになつたので、恐らく氏康が我が娘の身を深く案じたのであろう、その年のうちに氏真夫妻を小田原に招いている。

早川殿は国を出て十六年振り小田原に帰つて来たのである。世にも華々しい姿で今川家に嫁いで行つたのは十七歳の時であつたが今度こんな落ちぶれた姿で小田原の父母のところへ帰つて来たときはもう三十三歳に達していた。夫君氏真は三十二歳で、弟の氏政も夫と同年の三十二歳であつた。勝気な早川殿にとつてこの帰郷は悲涙の帰郷であつた。

「北条盛衰記」に
「今川氏駿州戸倉の城にも居住かなわすして、小田原へ来られければ、氏康馳走ありて、早川辺に屋敷を

建て、

立てて早川殿という」とあるが、今は早川殿のあった位置が不明で、「新編相模風土記稿」の早川村の条にも「今川上総介氏真館跡、今其跡詳ならず」と述べているが、これから氏真夫妻のことを早川殿と呼ぶようになったのである。しかし慈父氏康も慈母瑞溪院も彼女が嫁に入った当時の元氣さは既に消えて、ともにやや老いていたし、まもなく病を得て元龜二年(至)十月二日には父氏康が五十七歳で歿し、母もその四十九日目の忌日に世を去った。

よし聞えける。氏真の御前は氏政の御姉なれば、御恨の品々実に至極せり。氏真その下々に至るまで、氏政人倫にあらずと立腹限りなし。さて有る可きに非ずと氏真小田原を引き払い、家康を御頼み有って、妻子引具し、浜松へ落ち給う御心の内さこそと思いやられたり。一首

中々に世をも人も
恨むまじ
時にあわぬを
身のとがにして
氏真

氏政と信玄が和睦して、組んで駿河の地を分けどりにしようとする計画は、氏康在世の頃からひそかに進んでいたが、氏康の死と同時に露骨に表面化し、氏康の四十九日の忌日が終わるのを待って、今川氏真を亡き者にしようというのである。そして甲州から氏真暗殺者が派遣されて、氏真の身辺に迫っており、しかも氏政はそれに合意しているというのだから早川殿は立つ瀬がなかったであろう。仕方なく氏真夫妻は氏康歿後二ヶ月で、元龜二年の暮のうちに遠州浜松へ退去していったのである。

いやられる「小田原記」はこれを「御恨みの品々、実に至極せり」と書き、また同書は氏政の態度に対して痛烈な批判を加えて「抑々今川の家、代々小田原の縁者にて、早雲、氏綱二代重恩を請け、殊に氏真は御兄弟の契りあり。何に依りて信玄に諮らはれけん。今川殿を追い出し、かく情無き振舞いわれになし。誠に頼む本に雨の溜りぬ風情かな。中陰御にて唯云う人もなし。末の世まで嘲弄を受けん。当家の運も末に成りたると、小田原の諸臣悲みける」と述べている。

早川殿の憤りに余程のことであつたらしく、夫君氏真とともに小田原にて生んだ長子五郎範以を抱いて、譜代の旧臣いくばかを引き具して、白屋堂々と小田原を引き揚げいったという。

氏真、早川殿夫妻が浜松に行ったのは、徳川家康をたよつたのである。今はもう家康の芳情にすがるといふ道がないとして行つたのである。家康としては先年役束した言葉もある、今川夫妻を心よく迎えて、城の側に屋形を作つて夫妻をこれにすえ、懇情浅からずこれを労わつたので、氏真、早川殿もしばらくこの

地に安堵したのである。

(四)早川殿の最後

家康が氏真夫妻を庇護したのは、今川氏とは旧因縁が浅からず、かつて幼少の頃十年以上も今川家で人質生活を送つていて、その頃恐らく氏真とも交つた思いも残つていたのであろう政治的に言うならば、氏真は人の良い、御し易い人物だから、この人を庇護することによつて、幾分でも政治的に利用することができると考えたのであろう。しかし氏真には結局浜松もまた安住の地でなくなつて、去つて行つた。後一時京都にまで流寓し、父義元の旧怨を忘れて織田信長と交つたり、公卿衆と交つて蹴鞠の遊びに熱中したりした。天正十年三月、織田信長が武田氏を亡して駿河を徳川家康に与えたとき、家康が信長に進言して、駿河の半分でも氏真に与えるよう申し入れたが、信長は「氏真は天の虜するところだから与える必要なし」と言つて承知しなかつたのも忘れて、信長に頭を下げているのは痛ましい。

豊山栄光、或は機峰宗俊といふのもある。

さて氏真の夫人早川殿はこの数奇な生涯を送つた人物の妻として流転から流転を繰り返して、最後まで氏真の身辺の面倒を見護つて来た彼女は氏真との間に範以、高久、安信、澄存の男子を生んだ。長男の範以は五郎左馬助と称して、小田原の早川で生まれた子であつた次男高久は品川新六郎、三男安信は早逝、末子澄存は僧侶となつた。長男範以の子範英は後に幕府に仕えて従四位下左近衛権少将刑部大輔となり、次男高久の高如も従四位下待従式部大輔となつて、この二家が代々幕府に仕えて、故実家の高

家衆として知られたのである。娘が一人あつて幕府の高家衆である吉良上野介義定に嫁した。それ故晩年は夫君と共に江戸に住み静かな安定した生活を送つたらしいが、夫君に先立つこと一年慶長十八年(三)二月十五日に歿した。彼女も七十七歳の生涯であつた。諡名藏春院殿天安理という。

墓は東京都杉並区今川二丁目十六ノ一の観音寺今川家墓地にある。末子澄存(証存)こと、勝仙院が、この人は僧籍に入つて若壬子に住み大僧正までになつた人であるが、この人が母の二十五回忌に建立したものである。(この項おわり)

自修学校物語

西山 銚太郎 (16)

十六、記念碑建設

自修学校は現在向上高等学校として、隆々発展して居る。然し校名は改められ元の校舎のあつた処に学校がないのが甚だ物足りなく淋しい。「自修学校」は私の心のふる里である。自修学校の校舎が最初に建てられた地へ碑を建てて、その発祥地と、私共の「心のふる里自修学校」の名を後

世に伝え、併せて大井龍跡先生に感謝の敬意を捧げたいと思つたのは、もうずっと前からだつた。

然し在学者名簿が不備であり、激烈な戦争と、長い年月を経て来たので、健在の方々をどれ程探し出せるか予想もつかなかつた。資金の調達は出来たとしても小人数では意味がない。多人数の手で建ててこそ意義

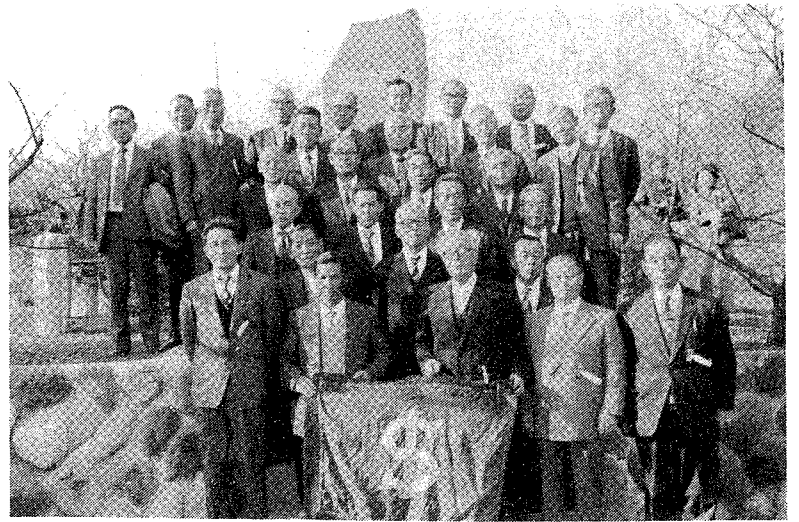
先づ名簿の整備から入った。然しそれも容易な事ではなかった。

昭和五十五年は、自修学校創立七十周年であり、又大井校長先生の三十三回忌でもあるので、此の機を逸すべきでない」と名簿不備のまま立ち上った。第一回の会合は、奇しくも七十周年の前日七月五日で

西山銚太郎、鳥居富次、柏木文雄、鳥居佐久治、柏木亀一、深沢英雄、二見為雄、石井政儀、町田浅義の九名だった。そして発起人として六十余名の賛同者を得た。前記九名と左記 高橋謙治、片野時雄、石川政春、穂谷野進平、石井公夫

の五名、計十四名を小委員として、大綱決定後の直接計画実行にあたる事とした。我々は校長先生から見れば、皆同じ教え子だから平等の立場でやろうとしたが多くの資金を扱うので責任の所在を明かにする必要上最小限の役員として、発起人代表西山銚太郎、会計係鳥居富次を選出した。

計画だけ大きくしてもと一応予算百五十万円で行動を開始した。無理や強要は絶対しない様申し合はせた少しでも不快の念を抱かせては大井先生に申訳ない。



六十余名の発起人は見えないう校友探しに苦心し、次第にその輪を広げた。募金は短期間だったが順調に進んだ。メ切予定日後に此の事業を知ったと後から後からと資金を寄せられ、メ切るのに苦労した。建設資金はメ切後の方を含んで四四四名、二九〇余万円に及んだ

除幕式当日偶然通りかかっ、この事業を知った静岡岡県小山町、湘北中学校出身の河野平氏は「大井先生

四mである。碑の正面には七十年後の今日も尚新鮮さを失はない校章を、題字は下沢英俊氏に「自修学校発祥の地」と、「第一回卒業生」の肩書をつけた署名をして頂いた。学校略史は、十余年間母校の教壇に立たれた大井謙玄先生にお願いした。石材は総て真鶴町亀川石材店のもので、同店亀川芳次氏の献身的な施工に依って完成した。

碑の裏面には、ここに学んだ記念に寄附者名を銅板に刻して固定した。又、昔はの徽章を帽子につけて頭上に頂いたが、今度はこれを胸に抱いて勉学に励んだ青年の頃の若々しさと健康を保つ様にとネクタイ止めにつけて記念品とした。

建碑は多くの方々の努力と協力によって立派に達成された。私は除幕式の式辞の最後を 「自修学校発祥の地の碑それは私共の心のふる里自修学校の名と、大井龍跳先生の偉大なる足跡とを、永く永く後世に伝える事でありましょう。」と結んだ。

終りに 記念碑は多くの校友、多くの関係の方々のお協力に依って出来上った。此の記念碑は誰しもが望んでたものであるが、誰かが発議し

なければならぬ。私は合計で満五年近い歳年を、大井校長先生のおそば近御薫陶を受けた。碑は何年かかっても、どんな苦労をしても作ろうと思つて来た。幸にして立派に完成して何よりである。

発起人の方々には交通費・通信費等総べて自弁で御協力願ひ、又発起人とか建設委員とかとして特に碑に残す様な事もなく、縁の下力持ちになつて頂き感謝の申し上げ様もない。何れもの方々には厚く御礼を申し上げる次第である。私はこれを機会に、自修学校の歴史を書き留めて置

萬治の義農下田隼人翁

川瀬 速雄(鳳山)

萬治の義農下田隼人翁の伝説、研究、考察は、郷土史家の諸先生が微に入り、細に渡つて発表なされております。伝説と実像、考察にいくつかの疑問もありましようが、南足柄市関本龍福寺の下田翁の墓石、頭徳碑に参拝し翁の遺徳、心情

嗚呼 義人下田翁

(通説)

下田惣四良狂生 下田惣四良狂生の如く
愛哀斯襟弊履情 愛哀斯襟弊履の情

強訴騒擾知極法
強訴騒擾 極法と知れど

猫鈴鼠勇虎懐行
猫鈴鼠勇虎懐行

吾郷足柄妻々穢
吾が郷足柄穢妻々

五代三鱗四六英
五代の三鱗四六の英

大久保藤忠治水
大久保が藤治水の思に

俵倉衍憲菅榮
俵倉衍憲菅榮

突宿奸麦租之制
突宿奸が麦租の制

郡邑嗚嗚一撥争
郡邑嗚嗚一撥の争

事耆庄邸俣洗禰
事に耆庄は邸俣の洗禰と

乾坤允訖訖話令
乾坤允訖話令に允う

雄山參壇靈祇祐
雄山に參壇し靈祇を祐じ

嘆願三圖領主醒
嘆願三圖領主の醒

百走千奔民撫妙
百走千奔民撫の妙

糟糠媼媼勳貞
糟糠媼媼勳が貞

回春三百萬治代
回春三百萬治の代

嗚呼誠丹恁爾成
嗚呼誠丹恁爾成

露月颯見偉業薫
露月颯見偉業は薫り

汗青有載義宗兄
汗青に載有り義宗に兄と

昭和五十七年六月
鳳山作

(通意)
制の恩徳や

下田隼人(通称惣四良)翁
大久保藩の酒匂川治水の恩

は狂人ではないかと思
恵に

ように
村人はもとより、鳥獸にい

染しみ、愛情、哀しみなど
たるまで、喜々として祭

弊履の如く捨てて
りを楽しんでいた

訴訟騒動は投獄されるかも
突然、幕府の小臣(稲葉藩

知れないと、知りながら
)が先例のない麦租税の

猫の首に鈴を付ける鼠、虎
布令に

の生死と
乾坤一擲、真心を持って酷

政の抗議に立ちあがった
大雄山道了尊の神靈に、ご

加護を念じ
藩庁に撤回の嘆願を再三行

ない
東奔西走、村民の鎮撫につ

とめ
糟糠の妻や老いたる母まで

が、励まし、力を合せて

六本松峠の句碑

林 周 平

御殿場線の下曾我駅から
裏の曾我山の山道を歩いて

登ると、小一里のところ
六本松峠がある。昭和五十

七年(西暦一九八二年)現
在では、私の立っている写

真のように松の木は一本も
なく加舎白雄の句碑が一本

立っているだけである。
加舎白雄は西暦一七三五

年に生れ一七九一年に五十
五才で亡くなったので、今

から算えると約二百年前の
人である。

その死んだ年は、江戸時
代の寛政三年で、天明につ

ぐ新俳句の勃興期であった
句碑は白雄の自筆を彫つ

たもので
人の知る曾我中村や青嵐

という句であるが、その
頭の六本松峠は、関東から

足柄峠へ通ずる表本通りで

くれました
それは今を去ること、三百

余年昔の萬治三年のこと
で

その真心は神に通じ、願
いはかない

雲晴れ、爽やかな涼風の如
く、偉業は薫り、青史に

「義民佐倉宗吾」にまさ
ると伝承されています。

ので、天明の頃は「曾我の
里」も曾我兄弟のことで天

下知れわたっていたので
あるが、その曾我の里の中

村というところは、六本松
峠の関所のあるところとし

て尚一層人の知るところで
あると強調しているのでは

ある。現在の六本松峠はミカ
ン山の一部で、何の変哲も

ないが、天明の当時は中村
氏の領地として鬱蒼とした

ところであったことは「青
嵐」の表現でもわかる。青

嵐とは夏の茂った森や木立
を風が吹きわたることであ

る。その六本松は二十年前
私が曾我へ移り住んだ頃に

は、その六本のうちの一本
の巨松が、峠の頂上に残っ

て聳えていたが、松喰蟲に
やられて今は一本も残って

いない。句碑も道路の整理
で場所を更えて立っている

が、全くその当時とは附近
の様子もまるきり無なって

しまっている。
この句の「人の知る曾我

中村や」という言ひ方から
考えたと、関所としての建

物もあつたであろうし、そ
れに附属する茶店とか色々

な建物や人達もいたであ
ろうが、今は人の子一人いな

い淋しいところとなり「人
の知る曾我中村」などの感

は全くない。青嵐の吹く森
も木立もなく、雑木がわず

かにある位のところである

中村を名乗る家も、その
峠から二宮の方へ下ったと

ころへ数軒今もあるが、下
曾我へ下った方へ本家らし

い中村家がある。古文書等
も残っているらしいが、天

明の頃の中村家を想像する
ことは出来ない。

加舎白雄が何故ここに句
碑を立てたのか、そのいわ

れも句碑には何も書いてな
いが、句碑の姿から考える

と、本人が自分で進んで建
てたものらしいことは想像

される。それは筆跡を見て
も気品があり、白雄の風格

がしのばれるが、自分の句
の肩に、わざわざ芭蕉の句

を一句彫りつけてあること
が如何にも際立っている。

その句は
ほととぎす鳴く鳴く飛ぶ

はいそがはし 芭蕉
という句で、何のために

この句を自分の句の肩に彫
ったのかを考えると、何と

なくそのところがわかるよ
うな気がする。

天明の俳壇というのは、
芭蕉の元禄俳壇から約百年

の後、蕪村たちによって提
唱された天明調という写生

派の俳句が盛んになった時
であるが、その写生派の関

東での代表者の一人が加舎
白雄である。関西の蕪村が

その主唱者となっているが
子規の蒐集したものを見て

も、寧ろ関東の白雄たちの

方が写生の実作には優秀な作品があるとも言えるようである。だから白雄として、天明朝の盟主である蕪村の句をわが句の肩に彫るべきであるのに、百年も前の芭蕉の句をわざわざ彫っているのは何故であろうか

はいとぎす鳴く鳴く飛ぶ
 はいそがはし 芭蕉

という句は、現在でも芭蕉の句にこんなのがあのかかる人も少いが然し味はつて見ると「鳴く鳴くとぶは」といふ言い方にも、如何にもはいとぎすの習性が活写されてをり、「はいそがはし」も動作の描写で、実際のほととぎすのあり方がその生命観の写生として直視されていることがわかる

昭和の現在にあつても実際のほととぎすの飛ぶさまを見るに正にこの通りで、その真実には少しの変わりもない。白雄はこの句こそ芭蕉の本性の句であると言いたいのであろう。

世の人は古池の句なんかを芭蕉の本性の句としてあがめるが、私はこの句が一番好きだ。そんな芭蕉のことを後世に伝えたいためにわが句の肩に彫りつけて置くと言いたいのであろう。

これは白雄の一見識であるが、それには加舎白雄自身も少し参考のために挙げて置きたい。

萍や生ひそめてより軒の雨
 絲遊にほどける草の葉先かな
 蚊遣火のけむりの末に鳴く蚊かな
 天の川星より上に見ゆるかな
 立出でて芙蓉の凋む日に逢えり
 朝はものの朝顔の花も新らしき
 舞ひすくむ虹や地に沿う影久し

どの句も人間の主観を言はず、ひたすら自然の具象

鉄道関係四方山噺

額 田 喜代春

(四十三) 線路と線形の話
 機関車が列車をひっぱる場合、勾配がゆるければ、より重い列車をひっぱることが出来ます。そのため、鉄道の線路は出来るだけ勾配をゆるくするように作られています。そこで、日本の国鉄では特別の場合(例えば、信越線の横川-軽井沢間の66・710を除いて)最も急な勾配は38・0(100)千メートルの距離で三十八メートル(のぼる)です。

また線路の曲線の半径は大きくする方がスピードを出せるので、出来るだけ大きくしています。

のみに直観している。空中に舞ひとまるような虹が今の世にもいる。影久しとはその舞ひとまる虹の影が地上にある時間を言っているその空間と時間の切り口の写生が誠に美事である。

こんな写生句は今でもめったにお目にかからない。白雄の句には人間がうろろろしていない。あるものは自然だけである。人間を直観で通過した自然だけである。これが本当の自然の大生命を写した、写生の本道であることを教えている

に継ぎ目があり、つぎ目はずぎ板の両側から、ポルトでおさえています。

(二) レール
 レール車両の重量を受けて、滑らかに走らせるためのもので、良質の鋼が使われています。そして断面の形は車両の重量にたえられように設計されており、普通の鉄道(狭軌)は一米の長さで40キロ、新幹線では60キロが使われています

(三) スイッチバック
 急な勾配の途中で、列車が停まると、発車がむずかしくなるので、折り返し式のスイッチバックの線形の駅が作られます。例えば、箱根登山鉄道の大平台駅のような駅。

(四) いろいろな分岐器
 一つの線路が二つ以上の線路に分かれたり、二つの線路が交差したりするためのもので、分岐器といつて素人は転てつ器ともいっておきます。

本線の場合は信号機と連動になっており、分岐器が本線の直線側で信号機が進め指示をすると、分岐器は動かなくなり、曲線側には開かない仕組みになっておきます。それから分岐器は、片開き分岐器、両開き分岐器、三枝分岐器、ダイヤモンド、クロッシングと車両の進行方向によって分

かれておきます。

(四十四) 信号と標識の話
 列車又は車両を安全に運転するために、信号装置が設けられています。

信号装置は、その目的によって、信号と標識に分けておきます。

信号は、列車または車両に対して一定の区域内での運転を指示するものです。標識は、形や、色などによって、物の位置や、条件などを示したものです。

そして両方共、運転士や保線作業をする人たちにとって、線路の条件を知ることが、重要な手がかりになっておきます。

(一) 自動式信号機
 信号機の進行、停止などの表示(色)が信号機と信号機で区切られた区間(閉そく区間)に列車があるかどうかで、自動的に変わるようにした信号機です。

(二) 機械式信号機
 列車回数のない線区では、信号機の表示を駅員の手で行なう機械式信号機が使われています。この信号機の場合も、閉そく区間に列車があれば、信号機と連動していて信号機の表示を変えることは出来ませんが安全です。

右の外に、線路、標識にもいろいろとありますが専門的になりますので省略させていただきます。

せて頂きます。

(四十五) 線路を守る
 列車を毎日安全に運転するために、沢山の人が働いておられます。

列車が昼夜間断なく走り続けておきますと、線路や道床、枕木の状態が悪くなり、整備を怠ると事故の原因になります。ですから線路を整備するのにいろいろの機械が使われていますが、その主なものを次に紹介しましょう。

(一) タイタン
 人が持つて使える小形の機械で、枕木の下のパラスト(砂利)をつきかためるものです。

(二) マルチプル、タイタン
 機械力で振動させながらパラスト(砂利)をつきかためるものです。最新のものはレールの高低の測定装置がついているので、一層乗り心地のよい軌道が出来ます。

(三) 枕木交換機
 作業を速く行なうために開発された機械で、三分ほどで新しい枕木に交換が出来ます。

(四) 犬釘うち機
 自動的に枕木に穴をあけて犬釘を打ち込む機械です

(五) レール探傷車
 列車に連結されて、走りながらレールの内部のきず

を超音波で調べる車です。
(ノ) 軌道試験車
列車に連結されて、高速で走りながら軌道のくま(レールの曲り、軌間、高低)などを測定して記録しこれによって整備が進められます。

(ハ) 限界測定車
新しい線路をつくったり線路ぎわの工事を行なう場合に車両が安全に通過することが出来るか、どうかを調べる車両です。

(イ) トンネルと橋
我が国の鉄道は山が多いので、トンネルを多く作らねばなりません、そこで、東海道並に山陽線の新幹線では、岡山―博多間では半分程がトンネル区間となつています。それから鉄道の線路はなるべく曲線を少なく、勾配のゆるやかな方が有利なので、山があるとトンネルを掘ることになることになるのです。トンネルを掘る時は、その土地の地質をよく調査して、その土地に適した掘り方が考えられます。

(2) トンネルの形
(イ) 乙形トンネル
(ロ) 第三号形トンネル
(ハ) 特殊形(海底トンネル)
(ニ) 特殊形(地下鉄用)
新幹線の新開門トンネルは、日本一長いもので、一

九七五年に開通(一八、七一三メートル)した。
(3) 鉄道橋
鉄道も道路と同じように河を渡るには橋を造らなければなりません、そこで鉄道橋は重い列車が渡るので丈夫に造られています。そして橋を架かける時は川幅や高さ、地質などによって橋の種類が決められます。

(四) アーチ橋
弓なりにそった形で橋げたを支える。
(イ) ラーメン橋
橋げたと橋脚をかたくつなぎ合せたもの。
(ニ) けた橋(プレート、ガーター橋)
橋脚の上に水平に橋げたのせたもの
(ホ) 連続トラス橋
列車の運転回数が多い所にかける、特に丈夫なトラス橋。

第二回信州方面(諏訪、松本、高遠)史跡めぐり

香川 政治

わが小田原史談会では、昭和五十七年度の行事第一回目史跡めぐりを信州方面(諏訪、松本、高遠)一泊二日の史跡探訪の旅を梅雨空の下六月二十三―二十四の両日、参加者四名バス一台にて、小田原藤棚前午七時十五分出発国道二五五号線を松田へ、松田より二四六号線で山北、小山を経て須走、ここから一三八号線を籠坂、山中、河口湖湖畔より一三七号線を御坂町、石和町、甲府昭和インターより中央高速道を一路西進、途中スムーズに諏訪大社上社本宮に午前十一時

神社出発下社春宮は参道より遙拝、雨の国道二〇号線を塩尻峠越え、塩尻峠の頂上にて北アルプスの麓に広がる安曇野平野の雄大な眺望を皆さんに楽しんで戴こうと計画しておったが天候不良で折角の期待も外れ残念!、車は塩尻市の郊外を抜け松本城に十五時三十分松本城前市営駐車場にて車を降り松本城を仰ぐとなんと華麗なしかも壮大な連結複合式五重六階の天守閣に驚愕、一同入城、城内を隅なく見学、建物に使用されている素材の頑丈さと勝れた工法にただ驚異の目を見張るばかり、名残り惜しいが城に別れを告げ、すぐ近くの旧開智学校を見学校舎内には教育関係の資料が展示されている。中に昔懐かしい明治、大正時代の教科書を見る。皆半世紀前幼き頃を想起され感無量!一同感銘深く校内を巡覧し次の武実屋敷の見学に向ったが、市内交通規制の関係で止むなくこれを割愛し二〇三見学したいところがあったが雨も降ってをるので早目に切りあげ美ヶ原の麓北アルプスを望む高台にある浅間温泉街のいずみ荘に十七時三十分旅装を解く。

を出発一同元気に松本市、塩尻と国道二〇号線塩尻より一五三号線を左窓に天竜川の清流、右窓よりは木曾山脈の峰を仰ぎながら伊那谷を南下し伊那市にて左折天竜川を渡り高遠町に向う伊那市より約二十分にて高遠町高遠城址公園に午前十一時着。天気は恢復初夏の日射し燦々と降り注ぐ「コヒガンザクラ」の樹林の中を往時天正十年(一五三三)科五郎盛信が織田軍に攻められ落城、その際一族、雑兵、婦女子まで一人残らず討死したという悲劇の城址、残された石垣、空壕、太鼓楼本丸、二ノ丸、三ノ丸と遺構をよく残している。これ等往時を偲びながら各自思い思い自由に散策、これが四月中旬頃であれば桜花満開お花見気分満点!今一度その頃に訪れたいね?

三ノ丸に藩校進徳館見学続いて給島田屋敷見学後絵島ホテルにて昼食、十二時三十分出発給島の墓所蓮華寺に向う。
蓮華寺は杖突街道沿いに在り墓は本堂の裏手山裾に当寺代々の住職の墓と並んで寂然と建っている。一同彼女の霊を弔い寺を後に二〇三古刹を尋ねたかったがバスを駐車する所なく残念乍ら割愛し二五六号線杖突街道を帰路に着く。
途中杖突峠のドライブイン小憩、展望台より茅野市諏訪市、諏訪湖を一望に眺め爽快な気分を味わい、十三時三十分出発茅野、諏訪インターより中央高速を一路東進、交通事情は往復ともスムーズ、途中休憩二回小田原駅前着十八時三十分一行元気に解散。
危ぶまれた天候も第一日目の午後一寸雨に見舞われたが全体的には天候に恵まれ各人各様に爽やかな史跡めぐりではなかったでしょうか?
終りに二日間の史跡その他訪ねた所を資料により記して不参の方達の参考ともとして記してみよう。
(一) 諏訪大社
諏訪大明神又はお諏訪さまとして全国津々浦々の人々から親しまれ、崇敬されている諏訪神社には上社と下社とがあり上社は諏訪湖の東南、宮川を遡った守屋山の北麓にある。下社は諏訪湖の北、下諏訪の町外れにある。両社は更に二宮に分れる。上社には本宮と前宮があり、前宮は本宮の北一・五キロの茅野市宮川にある。下社は春秋の二宮にて、春宮は町の北、秋宮は町の東にあり、両宮は約一キロを隔てている。
上社の祭神は建御名方尊命この神は大国主神の子

で一般に建御名方神(命)といひ、出雲の国譲り神話に、高天原からの使者建御雷之男神に抵抗し、敗れて科野国の州羽海まで逃げついに降伏したと伝える(古事記)。

下社は女神の八坂刀売命を祭る。建御名方は武水瀧で諏訪湖畔の水の神、八坂刀売は下社背後の和田峠守護の神である。

上下両社には上長者としてとも大祝があり、上社の大祝は建御名方神の神裔と称する神家(後諏訪氏を名乗る)。下社の大祝は信濃国造の一族である金刺氏(金刺舎人)であった。

当社は上下社四宮ともに一般神社のような本殿がなく、本殿に相当するものは秘所とされ、御神体は宝殿に祭られる。先づ上社本宮は東宝殿、西宝殿を中心に拜殿その他があるが、その配置は極めて異様である。

上社前宮も特殊で、宝殿に当る内御玉殿と十間廊などがあるにすぎず拜殿がない。これに対して下社の二宮はほぼ同じような社殿配置で、神楽殿の奥に拜殿、その奥に左右に並んで東宝殿、西宝殿があつても三間社神明造、両宝殿の中央奥に秘所神体木がある。四宮の二つの宝殿は正殿、権殿で、七年目毎の寅年、

申年にそのどちらかへ遷座され、併せて式年御柱大祭は、当年の五月寅、申の日に行われ、遷座に際して社殿の四方にある御柱が建て替えられる。これは神の依代とされ、上社は八ヶ岳から、下社は霧ヶ峰から一六坪余の樅の巨木を氏子が総力を上げて伐り出し運搬をする。なお宝殿は十三年目毎に交互に造替される。

(一)高島公園と高島城

長野県諏訪市に在り高島城は別名浮島城ともいふ。天正十八年(一五九〇)豊臣秀吉の臣日根野織部正高吉が築いたときは湖中に突出した浮城であった。これが築城に当って高吉の使役が苛酷で、領民を苦しめたので逃亡者が続出し、また石塁は墓石まで供出させたとしう怨恨の物語りが今も伝えられて名高い。江戸時代は諏訪氏の居城。天守閣は明治五年取り壊され現在の昭和四十五年の復興である。

(三)松本城

松本は松本盆地(安曇平)の中央に位置し、周辺に槍ヶ岳、穂高などの峻険な山脈が連綿として続いている。特に冬になると、黒っぽい松本城の天守と雪化粧の日本アルプスとのコントラストが美事であるという。松本城は国宝四天守の一

つで、天正十八年(一五九〇)石川伯耆守教正が和泉国より八万石をもって入封した。教正、康長二代にわたり旧深志城を文禄年間(一五九二-九五)に大修理し天守の他に、本丸御殿、居館、黒門、太鼓門などの門櫓など建設した。天守閣は五層六階、三四坪で、乾小天守辰巳櫓、月見櫓を附属した複合連結式天守閣の範として他の天守に見られない変化ある構造美を示している。

構造

内部は初期天守に見られる住宅風の装置がなく倉庫化して、屋根は初期天守に見られる大きな入母屋の屋根がなく、入母屋の形式をもつ千鳥破風をおいている。窓が少なく狭間を多く配している。その他石落狭間等に見られる初期の手法、外壁は上部が漆喰、下部が漆塗の下見板張りで、過渡期的の工法、古風な初期的な手法を残しながら、江戸時代の先駆をなす進歩的な手法をみせているところに、城郭建築の貴重な意義がある。

月見櫓は寛永年間(一六二四-四三)の改築で泰平の世相を反映し住宅風の意匠をとり入れた風流な武将の心情がうかがえる。

○狭間

矢、弾丸を発射する小窓を「矢狭間」「鉄砲狭間」と呼ばれ種々の形式があるが、松本城の狭間は極めて古式のもので外壁の漆喰(鉄砲に対し)下見板張(矢に対し)とともに種ヶ島銃の伝来後、弓、鉄砲を併用した当時の戦闘方式がうかがわれる。

○石落

「石落」は石垣をよじ登る敵に石を投じた防禦装置であり、松本城は古い形式であるばかりでなく、四隅の外に中間にも設けられてあり他城に見られない、貴重な遺構。

四回開智学校

幕藩体制が崩れて明治の新しい時代を迎えた時、松本の人々は教育の大切なことを痛感し、明治六年に開智学校を開校した。現在重要文化財に指定されている開智学校校舎は明治九年に建てられたもので、鉄道もなかった当時、舶来色ガラスを使った擬洋風建築を松本の大工棟架立石清重が設計施工したもので、工事費約一万一千円におよぶ巨額のものであった。その七割を松本町全住民の寄附によって調達された。

開智学校はその後、松本地方の教育文化興隆の中心であり、信州教育の発祥の学校となった。明治、大正時代に活躍し

た思想家木下尚江、教育行政家沢柳政太郎、教育者鳩山春子は開智学校に学んだ。

(四)高遠城址

花の高遠、月の高遠、雪の高遠などと言われ眺望の絶佳と戦国歴史との名城址高遠城は戦国時代武田信玄が遠江、三河方面に侵攻の拠点とした伊那谷の要所であったが、信玄歿後天正十年(一五三二)武田勝頼の武將仁科五郎盛信が織田軍七万に猛攻され一族郎党、婦女に至るまで一人も残らず討死したと言ひ悲惨な運命を辿った城址も現在は城域一帯桜が移植され、その数千二百本と言われ桜の樹林の間に昔を偲ぶ築堤、太鼓櫓や本丸、二ノ丸、三ノ丸の遺構が残されている。この城も明治五年廃城となり取り壊されたのである。

(六)進徳館

高遠藩は当時貧乏が続いたので、他の大藩の様に藩校が持てず、向学心に燃える武士は儒官の家に通うなど苦労していた。今から百十年程前、最後の城主内藤頼直は、先代からの希いであった藩校にかわるものとして、城内三の丸の空家を改造して学問所を開設。後に林大学の命名で進徳館と称されるようになった。文学部、武学部の一部から成り、さらに幼年、中年の部

に分れて大いに勉学にいそしんだ。建物は文学部のもので当時の面影を残しており国の史跡に指定されている。

(七)絵島田い屋敷

絵島の田い屋敷は、不便な非持の火打平に造られたあつたが、後年見取園によって現在地高遠城址公園の麓に復元された。十人近くの武士、足軽に屋敷見張られ、高遠にあること二十八年、六十一歳で歿するまでほんとうに田い屋敷であった。絵島について!!

徳川六代將軍家宣の時代江戸城大奥に仕えて権勢のあつた絵島は、役者生島新五郎との恋を問われて、高遠へ遠流とされた。高遠で絵島は仏門に帰依し、二十八年もの長い歳月を囚われの身として独り淋しくその生涯をこの地に終え、蓮華寺に土葬された。

(八)蓮華寺

絵島は「もし果てましたら、日蓮宗ゆえ法華の寺へ葬って下され……。」と云い残し、その墓がある。庫裡には彼女の遺品、堂には瀬戸団治作のブロンズ観音像、境内には有名な今井邦子の歌碑等があり、すべての罪をつぐなつた老女絵島の霊が安らかに眠っている。